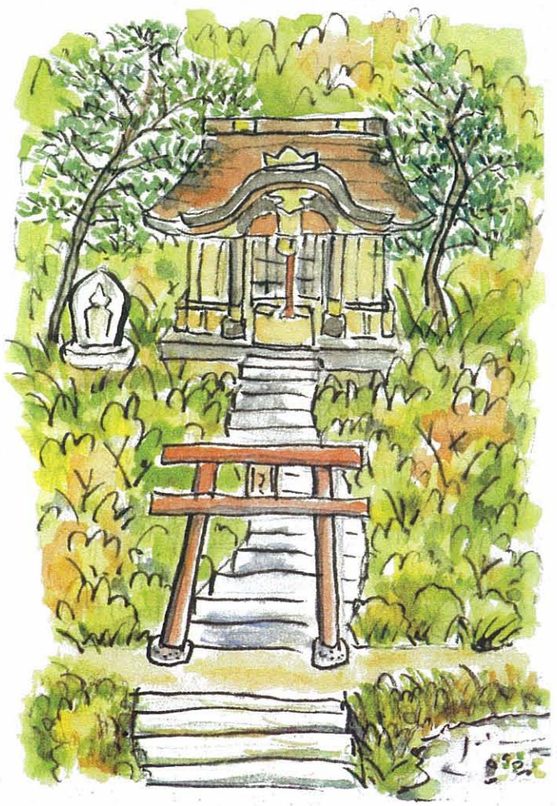
茅ヶ崎八景は昔の姿が彷彿されます。

茅ヶ崎公園は、３０年前は、殆どが山林で、一部に小さな田んぼがあり、薪炭用としての山林のすそには湧き水を集めて荒磯川のながれを作っている。今生態園にある御手洗池は、荒磯川をせきとめ、川の両脇の田んぼのために灌漑用溜池として作ったものです。この池は、今はおじいさんになってしまった人たちの子供の時の遊び場で、いわゆるプールであった。

御手洗池を通った水は荒磯川として早渕川に注ぎ、川にそって小さい田んぼがつずいており、春は、どじょうやうなぎ、カワニナという貝もいて夏は、蛍が飛び交い、茅ヶ崎町の名物であったと伝えられる。小学校の一年生の教室や中学校の音楽室は昔の田んぼであったところに作られたものである。

茅ヶ崎公園の山は、大地主の土地で、名木も大木も多い、中には百年杉といわれる木もあるこの一帯を「名木の山」として皆さんに見てもらいたい。。根の近いところは人が踏みつけないように柵でも立てなければ成らないかもしれないがこの山を町内会で名所として育てたいものだ。

又、茅ヶ崎の村民が管理してきた杉山神社は、
10月13日が祭礼で縁日もでてまさに♪村の鎮守の神様は♪で元旦には多くの人がお参りにくる。



現在の四五六峠への道（公園内に残る）

かながわの住みよい まちづくりをめざして

幻の茅ヶ崎八景

～茅ヶ崎の歴史を知ろう～

（港北ニュータウンガイドマップより）

港北ニュータウンのほぼ中央に位置する茅ヶ崎地区には「茅ヶ崎八景」として語りつがれてきた名勝がいくつかあった。その茅ヶ崎八景を絵で描き残した人がいる。茅ヶ崎で生まれ、茅ヶ崎で育った宮崎雄二（旧姓吉野）さんだ。宮崎さんは昔の茅ヶ崎の面影が消えていくのを惜しんで、「茅ヶ崎八景と自性院谷戸」と題した自作の画集に子供の頃の記憶を辿って絵を描いた。そこには、いにしえの茅ヶ崎八景が鮮やかに描き出されている。「港北百話」（昭和５１年度、港北区役所発行）によると茅ヶ崎八景とは「元治元年（１８６４～６５）から慶応年間（１８６５～６８）の頃、岸宇作氏が名付け親となり、近江八景になぞえて、茅ヶ崎の景色のうち、優れた風物や地点を八カ所決め、語り継がれたものである。大正年間までは、人々の口にものぼり実際の景色にも接することが出来たが、以後、時代の流れとともに口にする古老も少なくなり、一般から忘れられた「幻の八景となった」とかかれている。「昔を思い起こすことも楽しい」

茅ヶ崎では昔からあるものとして、今では茅ヶ崎城跡と観音堂を残すのみとなった。

現在は、ビルが沢山建ちました。そこに住む人々も、どんどん増えるでしょう。昔から住んでいた人達には思い出になり新しい住民の人には「住んでよかった」と思えるまちになるといいと思います。

企画・印刷
（財）神奈川県市街地整備支援センター
顧問 清水 浩 TEL 045-201-2237
e-mail:Kanagawa-kukaku-kyoukai@h8.dion.ne.jp

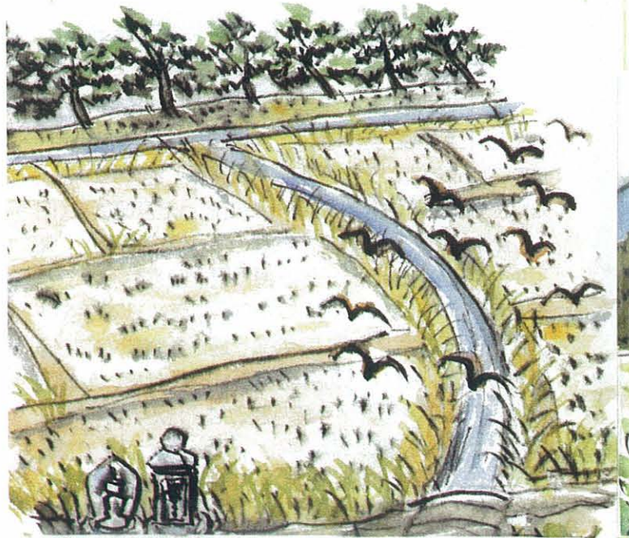
今回紹介の文章は宮崎さんの文章を基に、港北百話より当時の表現で転載させていただきました。今の町並みと重ねてみてください。

挿絵は、私の想像を鈴木真由美さんに絵にしてもらいました。

① 谷の中の蛍と堅田の落雁

㊐荒磯川と早淵川に囲まれた水田が、夏の夜は蛍、秋の稲刈り後は落雁の名所であった。五月の中頃から八月の終わりまで、数十万の蛍が飛びかう様は、蛍見物の人と相まって美しい眺めであった。稲刈り後は北国から南下してきた雁が一冬をこの地方で過ごし、その飛翔する姿は一服の絵を見るようであった。

㊒【雁は茅ヶ崎城址南方、御手洗池の周辺で巣を作り早渕川に出る通過点でもある。又どんと焼きなど祭事もこのあたりで行われた、今は田が埋め立てられて住宅地化している。】



② 清水の夕照

㊐大原に農業用水池がある。その池に入る水と、これから流れ出る荒磯川に沿って、標高１５メートルから２０メートルの丘が大原の大塚の峰に続く。落葉樹が多いこのあたり一帯は秋になると紅葉の夕照が美しく、絵となり歌となって残された風景の一つである。

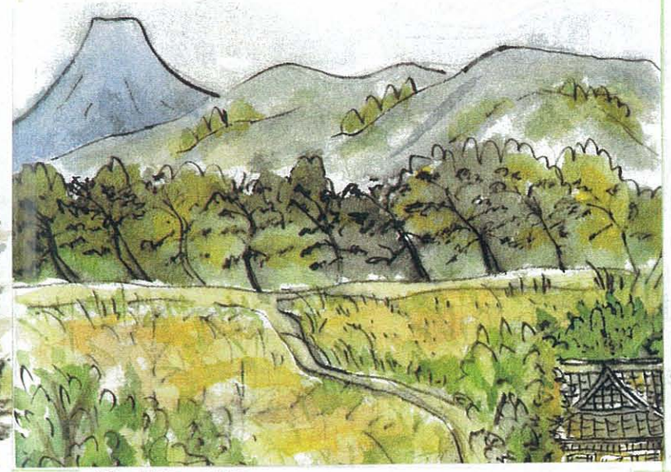
㊒【生態園御手洗池からみね道公園にいたる区間、おそらく茅ヶ崎小学校のあたりから見た夕日の光景。今でも想像できそう。この尾根道が分水嶺で南側の雨水は大熊川に、北側は早渕川に流れる。】

③ 四五六（しごろく）峠の夜の雨

㊐信仰の茅ヶ崎富士は、標高７４メートルで、国土地理院の水準点が置かれていた。緑区（現在は青葉区）の荏田町と東方町にも接していた。良く晴れた日には品川沖の白帆が見えたという。自性院の谷戸から中丸を経て四五六（しごろく）峠へ富士を見て荏田に行く。

道の両側は、広葉樹林や松林に囲まれたところ、或いは、切り通しになっていて、夜ともなれば犬さえ通らない寂しい野道であった。

㊒【区役所から柿木公園あたりを経て茅ヶ崎５丁目クレストヒルズあたりにあった茅ヶ崎富士に至る区間で、葛が谷の山の裾にあった、当時は、人も通らぬ淋しい曲がりくねってい道であった。】



④ 境田の暮雪

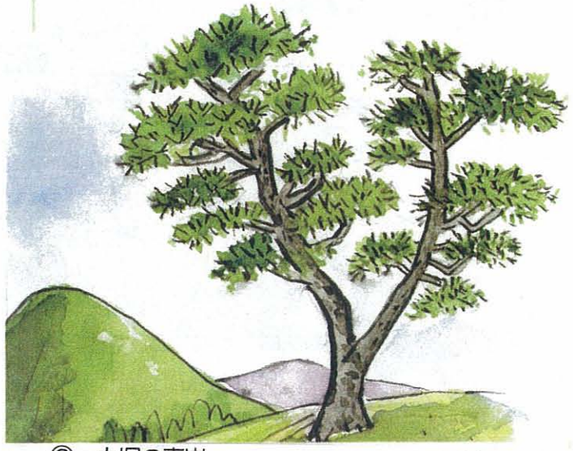
㊐境田橋から矢崎橋までの早渕川右岸に沿った境田全域は、底冷えのする日が４日・５日続いた後大雪となると、６０センチから１メートル積もることが年に２・３回あった。歩くと腰までの雪でどうにもならない。川向こうの大棚にある藁屋根のから立ち上る煙も雪のために見えない。時折「ボーン」という竹折れの音と風の音以外は聞こえない雪の暮れ。

㊒【八幡山公園と中央公園の山がせり出している地区一帯。昔は小さな谷戸から早渕川に自然排水するようなところで、水田も堤防より低い湿地であり、南側の中央公園の山が高く雪が溜まりやすい状況であった。】

⑤ 正庵の一本松

㊐四五六峠を登りきった右側の小高い場所にあり、樹齢数百年の黒松で、木は二股になっていて枝張りが良かった。以前この老木を切ろうとして鋸を入れたところ血が流れ出したので倒してみたら空洞になっていて、中には蛇が冬眠していたという。その後、二代目を植えたが昭和の中頃、松喰虫の被害にかかり切り倒されたという。

㊒【葛が谷公園の辺りに今もある小高い岡（海抜76m）で池辺に行く道と荏田渋沢に至る道に分かれた。現在この道の名残は峯道公園にある、松は渋沢に行く途中にあったと古老から聞いた。】

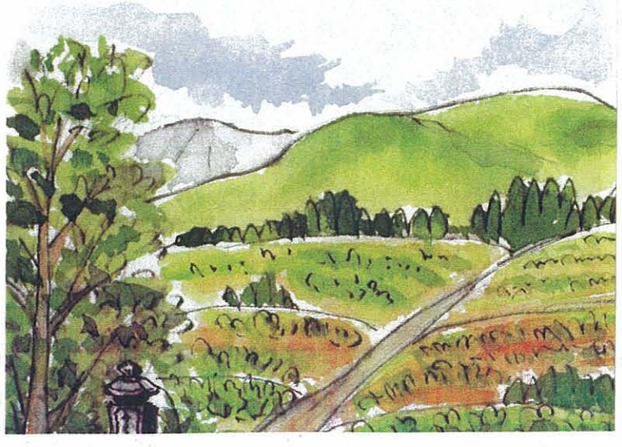


⑥ 大塚の青嵐

㊐少し奥に入った人里遠く離れた大塚原は雑木林が続く山街道である。

山の青葉が梅雨に入ってから一層増した頃、梅雨の晴れ間に吹く嵐を「大塚の青嵐」とは、よく名付けたものである。

㊒【現在の茅ヶ崎南２丁目ミカン公園・ドイツ学園の辺りで勝田から川和に行く丸子中山線と仲町台に行く道と茅ヶ崎峰道に行く山道が交差していたあたりの高台、広い空間で畑になっていて春一番などで砂塵がたまらなかったのだろう】



⑦ 観音の晩鐘

㊐茅ヶ崎のほぼ中央に、西国三十三番小机領札所第十九番の正観世音菩薩を安置した観音堂がある。この観音堂には小さな庫裏があり、この寺守りの僧がいた。月に一回ずつ村中を托鉢してまわって生活していた。正式の名前は言わず「かんのんぼう」の愛称で親しまれていた。

堂の軒に鐘が釣り下がっており、雨の日も風の日も一日も鐘を突くのを欠かしたことがなく、夕日の沈む頃は「ジャン」と突き、初め緩やかに、次第に早く、終わりは段々緩やかにして、「ジャーン」と締めくくるリズムがあった。

その鐘の音を聞いた田畑の農夫たちは、妻を家に帰して夕食の準備に取りかからせた。その鐘も太平洋戦争の初期に国策に沿って供出されてしまい今はない。

㊒【城山の地続きの高台で、今は寿福寺関係の円通閣が立っている。この場所はかって茅ヶ崎町内会館があった。時代が変わると土地利用も変わる。】

⑧ 城山（茅ヶ崎城跡）の秋の月

㊐城山の松や雑木林に名月のかかった有様を、中耕地や中村から、また、東前など、何処から見ても、秋の月が昇る素晴らしい光景として名所の一つに数えたのである。

㊒【中村・東前の地名は（名称）昔の小字で今でもバス停・橋の名として残る。今は家が建て込んで、センター南のスキップ広場からみる、城山の上に出る満月が良い、９時頃になると早渕川から仰ぐ城山の満月も良いとのこと】